日ロ交流

発行: 特定非営利活動法人日ロ交流協会
E-mail:nichiro@nichiro.org
Home Page: http://www.nichiro.org
〒106-0041東京都港区麻布台3-4-14
麻布台マンシヨン401号
Tel：03 (5563) 0626　Fax: 03 (5563) 0752

スキンケア講習会報告

内田 尚子

千葉さんから、年代別お肌のお手入れについての講習会のご依頼があり、4月28日（日）10時から2時間の予定で講習会を開催いたしました。

私はイナータススキンケア正規代理店で、イナータススキンケア販売会社会長とインストラクター2名の合計4名で伺いました。イナータスは素肌美をコンセプトにしているダーマコスメです。千葉さんとは、着物のきつけの先生同士ということでご縁がありお声をかけていただきました。

当日の参加者は20代から50代の女性11名。あと、通訳の方と千葉さんあわせて13名でした。会場はロシア大使館のレセプションホール。素晴らしいお部屋に机と椅子をきれいにセッティングしてくださっていました。

内容は20代、30代、40代、50代と年代別の代表的なお肌の悩みの原因とそれに対するお手入れについての説明。その後に、実際にスキンケアを使っての正しいお手入れ方法の実習をいたしました。

正しいお手入れをするためには、自分の皮膚を知る必要がありますので、簡単な皮膚の構造の説明から始めました。3年前にもスキンケア講習会をさせていただいたことがあり、その時に皮膚の構造の資料をロシア語に翻訳していただいていたので、その時の資料を使うことができました。

不必要な老化を防ぐためのお手入れは、清潔にする、乾燥させない、紫外線を浴びないという3つのポイントがあります。清潔にするために洗顔が必要ですが、水場が使えないとの事前の情報でしたので、おしぼりを使用し、お顔でなく、手の甲でしていただこうと思っていました。その状況でも、お顔でお手入れしたい方には、ファンデーション、メークをしないでいらしてくださいと事前にお願いしていましたところ、全員お顔でのお手入れご希望で、その関心の高さに嬉しい驚きでした。結果的には、洗顔することができ、皆様にお顔で正しいお手入れを体験し、気持ちよさを実感していただくことができてよかったと思っております。

お肌を健康な状態に保つための情報に対しても積極的にご質問いただき、また、終了後には、おひとりおひとりへのスキンケアアドバスをご希望されて、質問なさっていました。

ロシアとは気候も環境も違う日本でのスキンケアをどうすればよいか？通訳の方がいらっしゃったこの時なので、今までのお肌のお悩みを聞ける数少ない機会になったのではと思います。お肌を美しくありたいという思いは万国共通と実感いたしました

最後には、ロシアのかわいいスプーンとお菓子のお土産をいただき、集合写真を撮って和やかに閉会することができました。今回の講習会が、参加された皆様のお肌の健康と日ロ友好の一助になったのであれば幸いです。千葉さんには貴重な機会をいただきましたこと感謝申し上げます。

お知らせ

●ロシア語教室生徒募集中！

水曜初級1A-1（19：00～20：00）1A-2（20：05～21：05）
土曜上級（10：00～11：30）月曜準中級（18：00～19：00）
＊会員の方のためのクラスです。レベル別、プライベート、オンラインなどご希望に合わせて、担当よりご案内いたします。見学も一回できます。変更の場合もありますので、事前にお問い合わせください。
お申込み、問合せ：NPO日ロ交流協会事務所
E-Mail：nichiro@nichiro.org

●ロシア語懇親合宿

日時：2024年8月10日（土）～11日（日）
場所：静岡県田方郡函南町 伊豆畑毛温泉「富士見壮」
費用：24,000円（講習費、2食付き宿泊費含む）
＊ベテランの先生2名によりレベル別2クラスに分かれて少人数での講習会です。講習後、工場見学で実習もあります。

●ロシア料理講習会

日時：2024年6月22日（土）9：30～12：00
講師：スニトコ・タチヤーナ

●イワン・クパーラ祭

日時：2024年7月13日（土）予定
＊会員限定の行事もありますので、事前に事務局にお問い合わせください。

お願い

NPO日ロ交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。一口千円からいくらでも結構です。
振込先:郵便口座00160-9-66486、加入者名：日ロ交流協会
連絡先:日ロ交流協会事務局 E-Mail:nichiro@nichiro.org
Tel:03-5563-0626 Fax:03-5563-0752 ＊なお、お振込みの際に、寄付であることが分かるようにお名前の前に「01」とお入れください。よろしくお願い致します。

きもの体験会・通商代表部

4月17日（水）午後、例年春に行われている着物体験会が通商代表部のホールで実施されました。パブレンコ代表の奥様、アナスタシアさんが帰国された後にユリアさんが引き継がれて、友禅や生け花クラスも順調に継続されています。同様に、きもの体験の際の敷物も用意され、撮影場所も確保されていました。

着付け担当は森先生、辻田先生、私と、助手に佐佐木さんが入りました。全員、3月には卒業袴の着付けで忙しくしていましたが、4月に入り漸く一息ついた頃です。15日の月曜日には振袖、男性、男児や女児の着物のセットをダンボールで2箱、事前に送っておきました。

今回は合計で31名の方々が30分毎に6～7名ずつ来られ、午後1時から始めて4時前には終了しました。撮影はご家族ごとにまとまってされるので、家族全員が着終わってからとなります。小道具の扇子、刀、番傘などを持ち寄って楽しんでいらっしゃいました。

その後、私たちは手作りのケーキやお茶などをご馳走になりました。皆さんの喜ばれる顔を見たさに、いつも着付けをお引き受けしていますが、年々、小道具が増えたりするので撮影の様子もまた楽しみになっています。子どもたちのきもの姿も可愛さひとしおです。

毎回、駆けつけてくれるベテランの先生方、そして、通商代表部おもてなしに感謝いたします。

（千葉麻里）

能狂言、邦楽鑑賞会

5月5日（日）国立能楽堂に於いて第26回明乃會の狂言、能などを鑑賞した。ロシア語のスニトコ先生が指導を受けている加藤眞悟先生の会で、大使館に声をかけたところ81名のご希望があった。スニトコ先生が今回の出し物「定家」や能、狂言に関する解説をロシア語に訳して前もって配布しておいたが、なかなか難しかったように思う。西洋の演劇とはあまりに違い動きが極端に少ないので、特に子どもたちには退屈に感じたかもしれない。幽玄の世界で、無駄な動きをそぎ落とした能の表現方法は、座禅に近いものがある。

それでも、日本語クラスの生徒さんたちなどは最後まで鑑賞して、疑問点を持って帰っていった。

4月27日（土）須田理事のご招待で邦楽のコンサートのチケットが送られてきたので、大使館の方にお渡しした。13時頃には須田理事も出演されたので、アナウンスしておいたところ、大使館の方が写真（下）を撮って後日メールで送ってくださった。琴や尺八など大規模なコンサートで、ぜひまた聞きに行きたいという声が多かった。10月にはまたあるということなので楽しみだ。

ИКИГАЙ

キタヤマ　忍

現在これまでにないほどの人の交流と、同時に言葉の移住も盛んになっている。移住した日本語を見てみると日本文化や習慣、ある種の漠然とした思考や感情表現と、思いのほか深くて多種多様であることに驚く。ご存知の通りアニメの影響は大きく、異国の地では名もなき現象や感情だったものに名前がつき色づいていく様子は、タンポポの綿毛のようでもある。

昨今の代表といえばカワイイだろう。ロシアではｋａｖａｉｉｊ（ｋａｖａｉ）、ｋａｖａｉｊｎｏｓｔｙと形もほぼ定まり、ｋａｖａｉｉｊは形容詞としても活躍中だ。日本の「かわいい」とほぼ同じではあるが、ロシア従来のかわいいのプラスαなので、いわゆる萌え感が強い印象だ。アニメの萌えに限らずキティちゃんもｋａｖａｉｉｊし、ベビーのムチムチ感も猫ちゃんも、おばあちゃんの茶目っけも彼のちょっとした仕草もブラウスの袖の絶妙な透け感もｋａｖａｉｉｊ。「あの何とも言えない湧き上がる特別な愛しさ」に『萌え』と名が付き、その感情をｋａｖａｉｉｊと国を超えて共有できるようになったのだ。愛しさの共有が瞬時にできることほどポジティブなことはない。

もう一つの日本語は近年欧米で注目され、日本に逆輸入された日本独自の概念Ｉｋｉｇａｉ生き甲斐だ。数年前からSNS上でもロシア語で目にする頻度が増えたと感じる。とても壮大なメソッドだが簡潔にいうと「好きなこと」「得意なこと」「必要とされていること」「収入になること」が全て重なる事柄がＩｋｉｇａｉであり、悩める人達への生きるヒントとして注目されている。日本式生きる技術という紹介はあまりに壮大過ぎて、もっと気楽で良いのでは？と少々怯んでしまう。

一方でこのメソッドからどうしてたどり着いたのかは謎だが、シンプルに「自分のＩｋｉｇａｉは家族」「趣味の陶芸だと気がついた」という投稿を見ると、私も何かを始めたいと刺激をもらう。そして出前寿司専門店でありがちな「ｃｅｔ-Ｉｋｉｇａｉ」は寿司とうまいもんの欲張りセットで憧れのｋｕｙｄａｏｒｅ食い倒れを体験できる。まさにＩｋｉｇａｉだ。

さて、日本語の場合はどうだろう？ケセラセラ、OK、ビバ。今の私に思いつくのは日本式生きる技術とは真逆の言葉ばかりである。

（ビデオグラファー）

＊生き甲斐は様々な企業名にも使われている。右の写真は日本食チェーンのレストラン「生き甲斐」

＊＊下はカザフスタンの「生き甲斐セット」

● 広報部宛、ご投稿、ご意見をお待ちしております

国際放送史研究の戯言No028

戦術放送局とは何か

島田 顕

第二次世界大戦中の秘密ラジオ放送局として、戦術放送局というものがあった。ヒトラー治下のドイツに対する放送を紹介している、コンラッド・ピュッター著『「第三帝国」に対する放送、亡命者の放送、一九三三年から一九四五年まで、ハンドブック』で、このような放送局があったことを初めて知った。

戦術放送局とは、戦線の最先端部に位置し、主に対峙している敵軍兵士に対し、厭戦気分を蔓延させ、自軍への投稿を呼びかけることによって、目前の敵戦線の崩壊をねらったものである。ソ連発信のものとしては、極地放送局「真実」、「バルチクム」放送局、兵士放送局「東プロイセン」、前線［向け］放送局の四つがこれに当たる。

戦術放送局の特徴だが、小型の移動式送信機で放送していたことが挙げられる。当然、所在地が一定ではないし、送信機が移動式の小型のものであるために、送信出力は小出力である。また送信周波数は一定のものではない。送信出力が小出力であることにより、広範囲に向けた放送はできず、限定的である。放送スケジュールは決まっていない。毎日やるものもあるし、気まぐれである。さらに一日のうちいつ放送するのか定まってはいない。加えて、一度に一つの周波数しか使えない。兵士放送局「東プロイセン」と「バルチクム」放送局については周波数が決まっていたらしいのだが、前線向け放送局、極地放送局「真実」については、移動式送信機であること以外はわかっていない。加えて従事していた人数が少数に限られていたことが挙げられる。さらに戦術放送局の放送は、敵戦線直後に位置する都市の住民に対しても放送を行っている。これから征服、陥落させようとする地域の住民を味方に付けようと試みているのである。

放送内容として、捕虜を出演させていること、捕虜の郵便、手紙を紹介していることが挙げられる。そしてナチス政権の滅亡の可能性が高いことを主唱し、さらには指導者の不正行為、指導者としての不適格性の指摘、後衛地域の堕落と腐敗の状況、汚職、全体主義の原理原則に反する行為、指導者の利益の独占、指導者の不法行為、指導者の娯楽行為、余興などを訴え、指導者に対する集中した批判を展開したという。

小出力かつ、めまぐるしく変わる周波数に加えて、しかも放送時間も一定でないことによって、これらの戦術放送局の放送に耳を傾けていた聴取者の数が限られることになったことは想像に難くない。ほとんどの者が耳にすることができなかったといってもよいだろう。たまたま、聴いた、聴こえたということくらいのものであり、放送の反響を調査することは事実上不可能である。

だが効果が薄かったことと、効果に対する期待の大きさは別である。おそらく、他のソ連発信の秘密放送局の効果が徐々に知られるようになって、指導部内でこのような戦術放送局の役割が大きいと考えられるようになり、戦術放送が行われるようになったのだろう。

カザフスタン旅行記・①

湖、峡谷と広がる草原：自然豊かな町　アルマトイ

チェ・ジェームズ

ロシア語の勉強を始めて間もなくコロナになり足止めを食らいましたが、2024年5月のゴールデンウィークで念願の中央アジア旅行を実現できました。最初は国際情勢と円安のニュースが飛び交う中で多少の不安がありつつ、35歳という節目の年で悔いのない人生を送りたい！30代前半の最後に1回大冒険をしてみたい！という気持ちで、半分衝動買いでアルマトイへの往復航空券を購入した時には、後に一生忘れられない旅が待ち受けていることをまだ知らなかったのです。

わくわくしながら朝から成田空港に向かい、仁川国際空港の乗り継ぎで早速中央アジアへ出発。およそ5時間の旅で現地時間21時頃カザフスタンの旧都アルマトイに到着。時差が4時間あるため日本時間25時で、眠気と戦いながら空港内の看板にあるロシア語とカザフ語の文字を目の当たりにし興奮を隠せませんでした。すぐにでも町に出てみたかったが、その前にまずは両替。日本では現地通貨「テンゲ」が手に入らなかったので、円安で泣きながらも成田空港で米ドルに両替してから現地空港でテンゲに替える必要があります。その後、タクシーでアルマトイ市内へ。

アルマトイ（Алматы）はソ連時代から1997年まではカザフスタンの首都で人口も200万近く、カザフスタンの最大の都市です。新都のアスタナに比べて比較的ソ連時代の建築物が多く残っています。中国とキルギスタンとの国境も近くて、顔を上げれば地平線の果てに天山山脈が見えるぐらいです。シルクロードの遺跡が多いと知られるウズベキスタンに比べて日本であまり知られていない印象ですが、町の近くには北米のグレードキャニオンを彷彿させるチャリンキャニオン、山中の秘境のコサイン湖、標高2500メートルのビッグアルマトイ湖など、絶景のスポットに囲まれている自然豊かな町で、今回の旅も想像以上に映える写真をスマホに収められました。旅行中は中国、韓国、香港、インドからの観光客に逢いましたが、日本人の観光客には1人も遭遇しなかったのが少し残念でした。これがきっかけでより多くの日本の方々にカザフスタンの魅力を知ってもらいたいと思います。

ホテルにチェックインした時は既に現地時間23時でしたが、初めての中央アジアなので早速周りを散歩することにしました。豊かな自然環境に囲まれたアルマトイの町は発展していて暮らしやすそうな都会です。市内の道端にスクーターを多く見受けられ、配車アプリのYandexやJET、Whooshなどのアプリで予約すればすぐスクーターが使えます。もちろんYandexのタクシーも安く利用できます。6,7キロの移動も大体500円で行けますので非常に便利です。ただ1点不便なのは、そういったアプリの利用にはほぼクレジットカードの登録が必要で、日本のカードで登録できない場合があることです。実際私が使用しているクレジットカードが何故か拒否されたため、現地での支払いはほとんど現金でした。またカザフスタンではKaspiという万能アプリがあり、そのアプリで簡単に他の人に送金できるので、地元の人もほとんどそれを使いお金のやり取りをしているようです。旅行中一回Yandexのタクシーに乗った際、手元に1万テンゲの札しか持っていなかったため、1900テンゲの代金をそれで支払おうとしたら運転手さんに難色を示され、Kaspiの番号を教えるからあとで送金してと言われました。Kaspiの登録にはクレジットカードなどの情報が必要で結局登録できず無銭乗車になりかけましたが、幸いカザフスタンに留学したことのある友人に頼み後日無事に支払うことができました。

しばらく散歩して近くのスタローバヤ(大衆食堂)でシャーシリックを堪能したあと、翌日のバスツアーに向けて就寝。無事に1日目の旅を終えました。（続く）

ウズベキスタン便り

ウズベキスタンのワインとワイナリーツアー

川端 良子

ウズベキスタンでは、イスラム教信仰が盛んとなり若者のアルコール離れが進んでいるが、パーティーでは今でもウォッカが欠かせない。たくさんのお料理とともに、ウォッカでの乾杯が続く。ウズベキスタンの高級ウォッカとして有名なのがカラカルパクスタン自治共和国の「カラタウ」である。以前はカラカルパクスタンに行かないと購入が難しかったが、今はタシケントのリカーショップにいくつもの種類のカラタウが並んでいる。

一方、ウズベキスタンのワインも種類が増えてきた。特に、ソ連時代と違い、ドライワインが主流となっている。サマルカンドのワインやブランデーは近年ヨーロッパの技法を取り入れて、世界的に有名なブドウ品種で造られたワインを販売している。一方で、ソ連時代にジョージアから取り入れた品種で造るワインも多くある。これらの一部は、今では日本でも飲むことができるが、現地で販売されているワインは種類が豊富である。ブドウ品種名がついたものもあるが、女性の名前がついたワインもある。この女性はだれ？

と聞いても、さあ？といわれるが、ワインの品種ではなく、ウズベキスタンの女性の名前であることは間違いないようだ。タシケント、サマルカンド、スルハンダリアなどのワインが有名であるが、他の地方でも造っている。ワインやスパークリングワインは女性が飲むものという感覚があるようで、お酒を飲む男性でもワインはちょっとというウズベキスタン人は多い、特に、スパークリングワインは今でもシャンパンスカヤと呼ばれ、女性用の甘いものが多い。

サマルカンドに行くとワインツアーに参加することができる。もっとも有名なのは、サマルカンドの旧市街のソ連時代からあるブランデー製造所のツアーである。ガイドブックにも乗っており、ワインとブランデーの試飲が有料でできる。サービス精神旺盛で、10種類の試飲ができ、量もたっぷり、すべてを飲み切るのが難しいぐらいである。私が行ったときには、ここで販売をしていなかったので、近くのリカーショップに行って購入した。ウズベキスタンでは、スーパーマーケットではお酒の販売はなく、リカーショップに行かないとビールも購入できない。ただ、バザールやスーパーマーケットの近くにはリカーショップがあることが多いので、お酒を飲める方はぜひとも現地のものを試してほしい。　（日本ウズベキスタン協会理事長）

ロシア流奏法

畔上 明

ロシアとの関わりのある仕事を2年前に失って以来、週の半分は99歳の母と過ごす身。母とは共通の趣味である映画鑑賞を、最近は1930～60年代のDVD作品を楽しむ中、名前を知るばかりであったヴァイオリンの名手ヤッシャ・ハイフェッツ(1901-87)が本人役で出演し経営難の音楽学校を救うアメリカ映画「かれらに音楽を」(1939年)に感銘を受けました。

ロシア帝国ヴィルノ(現在のリトアニアのヴィリニュス)生まれのユダヤ人ハイフェッツは1910-16年サンクト・ペテルブルク音楽院に学び、その間1912年のベルリンを皮切りにヨーロッパ各地へ演奏旅行、1917年には海を越えてカーネギー・ホールでのデヴュー、それ以降アメリカに永住することとなったのでした。

ハイフェッツは4度日本を訪れているのですが、最後の1954年の日本滞在の際に当時神童と騒がれていた渡辺茂夫(1941-99)少年のヴァイオリン演奏を聴き、感嘆を禁じ得ずジュリアード音楽院で学ぶことを推薦したのでした。

少年の父加藤誠とヴァイオリニストの母鈴木満枝とが離婚したため5歳の茂夫は叔母の美枝子とその夫である渡辺季彦によって引取られ渡辺夫妻の養子となります。渡辺季彦(1908-2012)は東宝交響楽団のコンサート・マスターであり、又アウアー奏法を研究しその技術を「渡辺ヴァイオリン・スタジオ」での生徒指導に生かした教育活動も行っていました。

ハンガリー出身のヴァイオリン奏者レオポルド・アウアー(1845-1930)は、アントン・ルビンシテインとロンドンで出会ったことがきっかけで1868年から50年近くロシア革命の年まで、サンクト・ペテルブルク音楽院の教授を務め、その教え子にハイフェッツやジンバリストらがいたのです。

さらに、諏訪根自子、巖本真理、潮田益子、前橋汀子らの生みの親である小野アンナ(1890-1979)も1908-13年アウアーに学んだのでした。

アウアーのヴァイオリン奏法の流れを汲む演奏法を、ロシア流奏法と呼ぶ人たちもいて、渡辺茂夫もその奏法を育ての父親である渡辺季彦から習得し、7歳よりリサイタルで舞台に立ち、暁星中入学したばかりの12歳の時にその才能をハイフェッツに認められたのでした。

そして、1955年14歳の渡辺茂夫はアメリカに渡り、9月よりニューヨークのジュリアード音楽院に入学しイワン・ガラミアン教授のもとで研鑽に励むのです。しかし、環境の変化によるものか様々な憶測もありますが1957年に入ると精神的不安定の兆候が見られ11月睡眠薬大量摂取による危篤、一命は取り留めたものの脳に障害が残り、翌年1月に16歳で日本へ帰国。

一説には、ガラミアンの教授法と渡辺茂夫のアウアー奏法との確執に一因があるとも言われているようです。

それ以降41年間、口もきけず身体も思うように動けず、その痛々しい姿が1996年の毎日テレビ【悲運の神童】天才ヴァイオリニストの『劇的すぎる半生』で映し出され、現在Youtubeでもご覧頂けます。

同じ年、彼の10代の頃の演奏CDも発売され、特にサン・サーンス「序奏とロンド・カプリッチオーソ」は、ハイフェッツの「かれらに音楽を」で不良少年の心を揺り動かしたシーンと相まって、心打ち震わせる響きが伝わってくるのでした。